



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

公共文化施設と教員養成系大学等との新たな関係づくり：
大学の専門的な教育力を効果的に導入したダンス・アウトリーチ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, るみ子, 豊福, 彬文, 矢吹, 修一, Toyofuku, Akifumi, Yabuki, Syuichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4844

公共文化施設と教員養成系大学等との新たな関係づくり

～大学の専門的な教育力を効果的に導入したダンス・アウトリーチ～

高橋るみ子*・豊福彬文**・矢吹修一***

Build a new Relationship between Public Cultural Facilities and Teacher-training Faculty —The Dance-outreach which has introduced the technical education power of university effectively—

Rumiko TAKAHASHI*, Akifumi TOYOFUKU**, Syuichi YABUKI***

1 はじめに

今般の「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（以下、「劇場法」という。）の「人材の養成及び確保等」（第13条）に、「国及び地方公共団体は、・・・（省略）・・・劇場、音楽堂等の職員の資質の向上を図るため、劇場、音楽堂等と大学との連携及び協力の促進、研修の実施その他の必要な施策を講ずること」が示された¹⁾。同じく「劇場法」の「学校教育との連携」（第15条）に、「国及び地方公共団体は、学校教育において実演芸術を鑑賞し、又はこれに参加することができるよう、これらの機会の提供とその他の必要な施策を講ずること」が示された。さらに、「劇場、音楽堂の活性化に関する法律の施行について（通知）」（文部科学省、2012年6月27日）に、「劇場、音楽堂等の事業を行うために必要な専門的能力を有する者を養成し、確保するためには大学等の機能を生かすことが重要である」（二 留意事項の「学校との連携」）が示された²⁾。これらが本論の出発点となっている。

本論の中心的な課題は、劇場、音楽堂等（特に、公共文化施設）と大学（特に、教員養成系大学等）との連携・協力が、公共文化施設と「学校教育との連携」を促進させること（教員養成系学部の一つの可能性）を実践的実証的に示すことである。

この中心的な課題を解決するために、いわき芸術文化交流館アリオス（以下、「アリオス」という。）が、宮崎大学教育文化学部の資源（舞踊学研究室）を活用したアウトリーチ系事業（特に、学校に関わるアウトリーチ事業。以下、学校に関わるアウトリーチ事業を「アウトリーチ」という。）を実施した。それが、おでかけアリオス「んまつーポス身体表現ワークショップ」（以下、「本実践」という。）であり、その“ふりかえり”から、教員養成系大学等の機能を生かした取組が、アリオスの職員（以下、アウトリーチをコーディネートする職員を「担当者」という。）の実践力を高め、担当者の資質の向上が「学校教育との連携」を促進することを示すこと、これが本論の中心的な内容である。

*宮崎大学教育文化学部

**宮崎大学大学院教育学研究科院生

***いわき芸術文化交流館アリオス

本論の着眼点となったのは、東日本大震災の翌年（2012年）に出版された『文化からの復興市民と震災といわきアリオスと』³⁾の中で、アリオス支配人の大石時雄氏がアーティストについて述べた一文「地縁、血縁がなくとも、新しい出会いを生み出していく回路を、アーティストは持っている」である。

折しも2012年は中学校『ダンス』が完全必修化された年である。中学校『ダンス』の必修化については、学校関係者はもちろん、学校教育との連携に取り組む公共文化施設も興味・関心を示しており、実際にダンスのアウトリーチに取り組み始めた公共文化施設も少なくない（後述）。しかしそれらの公共文化施設の職員の多くは、中学校『ダンス』が必修化となるまでに、『武道』との選択必修・男女共修（1991～2011年）があり、それ以前は女子必修が長く続いたこと等を知らない。あるいは、すでに65年前（1947）に「ダンスは『ダンス』と領域名称をとり、はじめて、文化と教育が名称上にも同一の地平に立つことになった」⁴⁾ことや、アメリカの大学では「ダンスは体育か芸術かの声が挙がり、戦時を経て、ダンス専攻の多くが体育を去り、種々な形態で芸術系の学部・学科に位置づき現在に至っている」⁵⁾こと、ダンスを「体育」（中・高等学校は「保健体育」。以下、「体育」という。）に位置づけたわが国では、ダンスの学科や専攻をもつ芸術系大学及び学部が少ないこと、したがってダンスに関わる研究は、もっぱら、教員養成系大学等の教員（舞踊教育）が行っていること等を知らない。中学校『ダンス』の必修化を機に、ダンスのアウトリーチによる、新たな、学校教育との連携を図ろうとするならば、学校教育の歴史的文脈で、中学校『ダンス』の必修化を捉えたり、『ダンス』が抱える問題を学校や教員と共有したりすることは大事である。ただし、公共文化施設の職員が「“芸術経験としての問題”と“身体形式としての問題”を共存させている」⁶⁾『ダンス』について学習する場は少ない。これも、本論の着眼点となっている。

2 劇場、音楽堂等の活性化に関する法律

第1章で述べたように、「大学との連携及び協力」が「劇場法」に示されたことで、芸術系大学等との連携及び協力を模索している公共文化施設は少なくない。⁷⁾しかし、そうした公共文化施設の多くは、「劇場法」に「学校教育との連携」が示されたことで、教員養成系大学等の教員が公共文化施設との連携及び協力に興味・関心を持っているということを知らない。実は、芸術系大学等有する資源には及ばないとしても、教員養成系大学等には、芸術教科（音楽、美術）及び芸術教育にかかわる教員、教育研究機能施設、資料等、「学校教育との連携」のために生かすことができる資源は多い。また教員養成系大学等の場合は、実習を通して、公共文化施設の担当者の資質の向上（子供を対象としたアウトリーチのための実践的な能力の向上）を図ることができる。さらに教員養成系大学もしくは学部は、現在は、全ての都道府県に設置されており、地域の公共文化施設が「大学との連携及び協力」を呼びかけ易い大学である。

以上、舞踊学研究室（以下、「高橋研究室」という。）と東北最大規模のアートセンターであるアリオスとの連携・協力は、全国の教員養成系大学等に先行した、宮崎大学教育文化学部の新たな可能性を拓く実践研究である。

3 大学の専門的な教育力

3.1 大学の専門的な教育力

第2章で触れたように、本研究において効果的に導入した「大学の専門的な教育力」とは、教員養成系学部の資源（教員、教育研究機能施設、資料等）であり、それはアリオスが取り組むアウトリーチ「おでかけアリオス」が、初めて、「体育」で取り組むダンス・プログラムが必要としている高橋研究室のことである。その高橋研究室は、“学校や授業をもっとわくわくする学びの場に変える”企画力をもつ研究室である。具体的には、「実演芸術に触れることを通じて、子供の発想力及びコミュニケーションの能力の育成、将来の芸術家の育成、並びに子供たちの芸術鑑賞能力の向上等を図る」⁸⁾ことを重視する研究室であり、これまでの「こどもと教師とでひらく表現の世界」⁹⁾を発展させた「こどもと教師と芸術家とでひらく表現の世界」の実践を提案・推進する研究室である。なお、子供たちがひらく「表現の世界」とは、「体育」の『ダンス』（小学校は『表現リズムあそび』と『表現運動』。以下、『ダンス』という。）の主要内容である「創作ダンス」（小学校は「表現あそび」と「表現」。以下「創作ダンス」という。）のことである。

また、本研究において、高橋研究室と共にアリオスと連携・協力するNPO法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER（以下、「NPO法人MCDC」という。）は、2008年に高橋研究室が立ち上げた実演家団体である。同じく「体育」で取り組む「おでかけアリオス」のアーティスト「んまつー波斯」（児玉孝文、野邊壮平、豊福彬文）も、「体育」で取り扱われる「創作ダンス」と社会文化のコンテンポラリー・ダンスとをつなぎ、ひろげる意図をもって、高橋研究室が養成した新進振付家・ダンサーである。NPO法人MCDCと「んまつー波斯」は、共に宮崎大学教育文化学部の資源であり、アリオスの支配人である大石氏（前出）が期待する「大学の専門的な教育力」である。

3.2 NPO法人MCDC

実演家団体であるNPO法人MCDCは、「劇場法」に「学校教育において実演芸術を鑑賞し、又はこれに参加することができるよう・・・(省略)」¹⁰⁾と示される以前から、高橋研究室と協力し、児童・生徒の負担が少ない（一律500円）、かつ学校現場のニーズに応える鑑賞教室を実施している。そのDMに、「ダンスに限らず、ベテランの教員でも見たことがないものを言葉で説明することは難しいものです。美術館で絵や彫刻を鑑賞するように、あるいは演奏会で生演奏を聴くように、子どもたちが一度でも、ダンスを観る、という体験をしていれば、（先生は）言葉でダンスを説明する必要がなくなります。」とあるように、鑑賞教室の目的は、ダンスの鑑賞学習と、教員のダンス指導力の向上の二つである。2008年度から2013年度までに、県内外の小中学校20校で開催している。実施校の多くは、この鑑賞教室を、「学校行事」の「文化的行事」（教科外活動の「特別活動」）として実施している。

なお「学校における鑑賞教室等に関する実態調査」（文化庁委嘱調査研究報告書、2008年）によると、宮崎県の鑑賞教室の実施率（92.8%）は、全国一位である。ただし、児童が負担する金額は、全国平均（650円前後）を下回る。また本県では、演劇と音楽を交代で取り扱うことが暗黙の了解となっている。この演劇と音楽のルーチンにダンスを加えること、それを本県から全国に広げていくこと、これがNPO法人MCDCのミッションの一つである。先の調査によれば、

全国の実態は、現代演劇24.8%、室内楽12.7%、ミュージカル10.2%、そしてバレエ・ダンス0.8%となっている。

これらが、NPO法人MCDCが、高橋研究室と共にアリオスと連携・協力して本実践に取り組むことになった理由である。

なお、鑑賞教室でダンスを取り扱うということは、教科外活動の「文化的行事」と、教科「体育」の学習内容である『ダンス』とを関連させて実施すること¹¹⁾であり、それは、“ダンスは体育でもあり芸術でもある”ことを認めることでもある。

3.3 コンテンポラリー・ダンスユニット「んまつー波斯」

NPO法人MCDC（前出）に所属する実演家であり、その代表理事及び副代表理事を兼務する振付家・ダンサーが「んまつー波斯」である。ユニットの結成は2006年。宮崎大学教育文化学部で『ダンス』に出会い、現在もスポーツとダンスの境界域で作品創作と上演活動を行っている。振付家・ダンサーの3人は、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校保健体育の教員免許を有し、教育学研究科修了、又は在籍している。

「横浜ダンスコレクション」ファイナリスト2回（2008、2012）、エストニア共和国招聘公演（2008）、「踊りに行くぜ！vol.10」全国巡回アーティスト（2009～2010）、「ソウル国際振付フェスティバル」ファイナリスト（2009）、宮崎県立芸術劇場「飛び出すこどもブンガクシリーズ#6」（2012）、「第7回福岡演劇フェスティバル」公募公演（2013）等、新進の振付家・ダンサーとして、国内外で活動を展開している。また、「次代を担う子供のための文化芸術体験事業」（文化庁）、「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術文化体験」（文部科学省）等の派遣芸術家として、県内外で実演披露とダンスのワークショップ（以下、「WS」という。）を実施。2013年度のダンスWSの実施数はすでに50回を超えている（2014年1月現在）。さらに宮崎県の多くの学校が応募する無料の「スクールコンサート」（主催：宮崎県教職員互助会）や、県内外の公共文化施設のアウトリーチ活動の実績も多い。

これらが、高橋研究室が、アリオスのダンスアウトリーチのアーティストに「んまつー波斯」を推薦した理由である。

4 アウトリーチと宮崎県の実態

中学校『ダンス』の完全必修化により、これまでは主に音楽によるアウトリーチに取り組んできた公共文化施設も、ダンスのアウトリーチに関心を示しはじめている（前述）。例えば、第65回舞踊学会（2013年12月）の大会企画は、「劇場におけるアウトリーチ～ダンス・プログラムの可能性～」であり、公開WSやショーイング、パネルディスカッション等と併せて、一般研究発表では、大会企画に関連させた発表（高橋らを含む6演題）が行われている¹²⁾。

宮崎県の場合も、県内唯一の県立劇場である宮崎県立芸術劇場（以下、「県劇」という。）が、2012年度に、ダンスのアウトリーチ¹³⁾を行っている。企画制作を担当する工藤治彦氏に、音楽系との違いも含めて、ダンスを含む演劇系アウトリーチについてインタビューした。工藤氏の回答から、県劇は音楽を主としたホールであるため、音楽系に比べると、演劇系アウトリーチの予算や人員等が少ないこと、演劇系アウトリーチの応募状況は、全県の小中学校（特別支援学校を除く）に募集案内を届けているが、過去3回は、毎年3、4校程度の応募数であること、

演劇系アウトリーチはまだ端緒についたばかりで、プログラム開発と人材育成を同時に行っているところであること、個人的にはこの部分で宮崎大学教育文化学部と協働できるのではないかと考えていること等、県劇のアウトリーチの実態等について知ることができた。また、応募校の少なさから、県内の学校・教員の演劇系アウトリーチに対する関心の低さが分かった。

また本実践に先行して、2012年に、高橋研究室と宮崎市の公共文化施設の一つである宮崎市民プラザ、そしてNPO法人MCDCの三者が連携・協力して「んまつーポスによるダンスWS」（宮崎市民プラザのはじめてのアウトリーチ）に取り組んだ。しかし、初めての取組だったこともあり、募集案内を送った市内の小学校からの応募がなく、高橋研究室が推薦した中規模小学校の5年生（2クラス、72名）を対象に、「体育」に位置づけた2時間のプログラムを実施した。その様子を他の学年の児童と先生が見学したり、市の教育長や宮崎市民プラザ館長が視察したり、マスコミが取材したり等、実践が“見えてくる”と、学校関係者だけではなく地域も関心を示しはじめることが分かった。ただし、活動や成果を比較する前例が宮崎市民プラザにはないため、本研究ではインタビューの対象から除外した。

5 いわき芸術文化交流館アリオスと「おでかけアリオス」

5.1 いわき芸術文化交流館アリオス

アリオスは、2008年4月に第一次オープンし、翌年の2009年5月にグランドオープンした、いわき市が設置した劇場・ホールの複合施設である。設計段階から携わっている支配人、大石氏（前出）が、前掲書の中で、「ホールや劇場を持つ文化施設が、音楽や演劇やダンスの事業を実施するにしても、ただそれらの舞台を海外や東京から招聘して住民に鑑賞してもらうだけでは、これまでの文化会館の自主事業とは変わりはない・・・（省略）・・・できるだけ長い時間を、できるだけお金をかけないで、アーティストと文化施設のスタッフと地域住民とが楽しく過ごす、そういう仕組みをつくるのが大切だ」¹⁴⁾と述べているように、音楽・演劇・ダンスなどの公演に加え、広大ないわき市の隅々（市内の中山間部や限界集落と呼ばれる地域）にアーティストと出かけ、生の舞台芸術の魅力やWSを届ける「おでかけアリオス」など、地域との交流プログラムに力を入れている。

5.2 「おでかけアリオス」とダンス・プログラム

図1～4は、2008年度から5年間（図4のみ2013年まで6年間）の「おでかけアリオス」の実施状況を示したものである。図からも明らかなように、「おでかけアリオス」は主に音楽のコンサート及びWSを取り扱っている。その“初”のダンス・プログラムが、震災3か月後に実施した「珍しいキノコ舞踊団WS」である。このWSについて、「おでかけアリオス」の担当者である矢吹修一氏は、前掲書の中で、「音楽以上にすごい反応が返ってくる現場になりました・・・（省略）・・・子どもたちは体育館中を走り回り、コントロールが利かない状態になっていました。屋外で遊べないストレスで鬱積していた何かを、ここで一気に解放したのでしょうか。この時期に実施してよかったと思いました。」¹⁵⁾と述べている。本実践は、この「珍しいキノコ舞踊団WS」に続く、「おでかけアリオス」の2番手となるダンス・プログラムである。

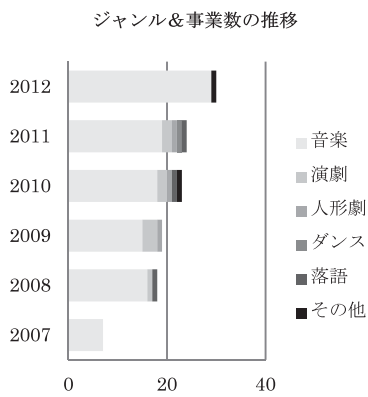


図1 おでかけアリオスの実施状況①
(作図：高橋 2013)

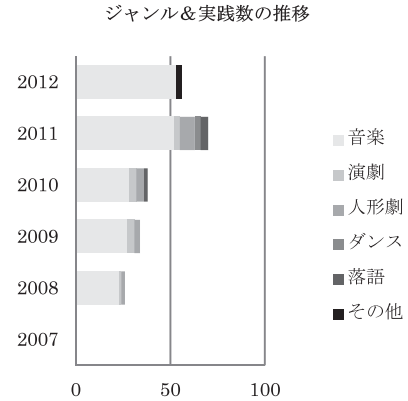


図2 おでかけアリオスの実施状況②
(作図：高橋 2013)

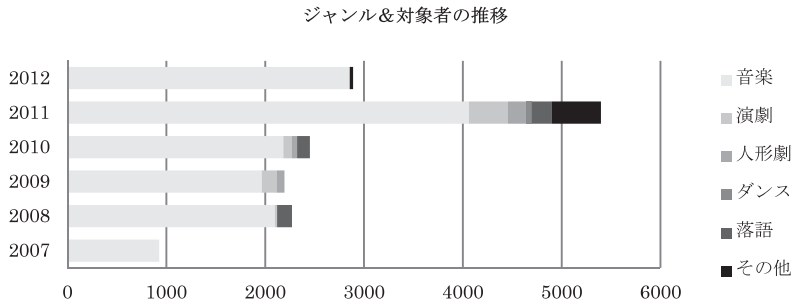


図3 おでかけアリオスの実施状況③ (作図：高橋 2013)

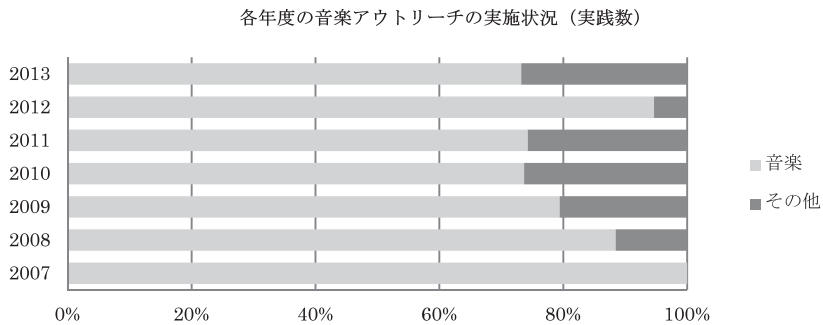


図4 おでかけアリオスの実施状況④
※2013年度は4～11月分まで (作図：高橋 2013)

「珍しいキノコ舞踊団」は、伊藤千枝氏が、日本大学芸術学部にて在学中の1990年に結成した、コンテンポラリー・ダンスのカンパニーである。カンパニーの全作品の演出・振付・構成を伊藤氏が担当している。この点が、メンバー全員で作品を創作する「んまつー波斯」と異なる点である。「珍しいキノコ舞踊団」のHP¹⁶⁾には、カンパニーの多岐にわたる活動と併せて、伊藤氏のソロ活動（例えば、「んまつー波斯」も2回出場した「横浜ダンスコレクション」に出場し、財団法人横浜市文化振興財団賞を受賞する、等）も紹介されている。CM等の振付も多い。また、2004年9月の東京都現代美術館を皮切りに、えぞこホール、岩手県立美術館、山口情報芸術センター、かなっくホール、八王子市芸術文化会館、松本市民芸術館等、2011年6月の「おでかけアリオス」以前にも、各地の公共文化施設で、子どもや大人を対象としたダンスWSを実施している。ただし、HPの活動紹介を見る限り、学校におけるWSは、品川区立の小学校（エイジラス事業）といわき市立白水小学校（おでかけアリオス）、そして横浜市金沢区小田小学校（横浜市芸術文化教育プラットフォーム）の3例と少ない。この点も、今年度のWS実施校が50を超える「んまつー波斯」（前述）と異なる点である。

5.3 「んまつー波斯身体表現WS」の文脈

アリオスが、市内の中山間部地域に位置する極小規模校の、いわき市立小白井小学校・中学校（以下、「小白井小・中学校」という。）で取り組んだ本実践までには、次の文脈がある。

その契機は、震災から1年が経過した2012年7月に、高橋研究室が、アリオスの企画制作課長の中村千寿氏（元県劇の職員）に、ダンスならではの復興支援（「んまつー波斯」のWS）の可能性を打診したことである。なぜ打診したかと言うと、前掲書の中で、大石氏（前出）や児玉真氏（アリオスのチーフ・プログラム・オフィサー）が語る、アーティストやその活動に対する考え方、例えば、大石氏の「社会的機能として動いているアーティストを起用する」と「アーティストには、表現以外にも役割がある」¹⁷⁾、児玉氏の「今やらなければならないのは、会館やプロデューサーがアーティストとの関係を活用して、社会の要請を実現していくこと」と「アーティストが考える思いを社会化するために、プロデューサーは市民との間で編集的にそれを実現していく努力をする」¹⁸⁾等が、高橋研究室の教育・研究方針と合致していたからである。その9月、中村氏が研究室を来訪し、その後に「体育」に位置づけることで子供たちの心身の健やかな成長を図ることや、大学教員がアドバイザーになること等を条件に、本実践の実施が決定した。

6 おでかけアリオス「んまつー波斯身体表現WS」

6.1 アドバイザー（大学教員）の役割

本実践では、実施の決定から第1回のWS（2013年6月24日）に至るまでの間に、4回の打ち合わせ会議が設定された。大学教員（高橋）は、初回（於アリオス）と第3回（於横浜STスポット）、第4回（於アリオス&小白井小・中学校）に参加した。高橋は第4回（於アリオス）の会議で、また「んまつー波斯」の3人は第2回の会議（於アリオス）で、支配人の大石氏（前出）等と、アリオスの事業方針や「おでかけアリオス」の趣旨、本実践に期待する効果等について話し合うことができた。また、第4回の会議（於小白井小・中学校）で、担当教員から、本実践の目標、児童・生徒観を含む指導観、単元計画、指導案、使用可能な施設、担当教員の『ダ

ンス』指導歴、学校が本実践に期待する効果等について聞き取り、全6回の活動計画を作成した。会議には、「んまつーポス」（豊福）とアリオスの担当者2名（中村、矢吹）も参加した。

その際に高橋が留意した点は、「体育」へ位置づけた初めての「おでかけアリオス」であること、複数回実施する初めての「おでかけアリオス」であること、実施校が児童・生徒数7名の小中併設校であること、児童・生徒に「創作ダンス」の体験がないこと、担当教員に『ダンス』の指導経験が少ないこと、等の5点である。

まず、「体育」でダンスWSをするということは、近年注目されている「WS型の授業」¹⁹⁾をするということであり、それは「んまつーポス」と担当教員が協働して「創作ダンス」の学習のねらいを達成することであり、同時に「体育」のねらい（より一層の体力の向上）を達成することである。ここが、「珍しいキノコ舞踊団」のダンスWSと異なる点である。そこで、各回を、体力の向上を図るウォーミング・アップと、友だちと正解のない課題を創造的・創作的に解決するグループ活動、解決した課題を互いに見せ合う「まとめ」で構成することを提案した。

また、複数回（6回、12時間）のWSをするということは、「導入過程」（準備）と「展開過程」（実施）、そして「ふりかえり過程」（定着）で構成した「単元学習」をするということであり、回ごとに活動のねらいが変わり、活動の内容が進化・発展することである。ここが、これまでの単発の「おでかけアリオス」と異なる点となる。そこで、1回（オリエンテーション）、5回（1時間完結学習）、1回（作品発表）で構成した「創作ダンス」の単元学習を提案した。

次に、「創作ダンス」の体験がない、異年齢の小集団（7名）を対象に、『ダンス』の指導経験の少ない教員が授業を担当することについては、高橋と「んまつーポス」とが共同で開発した教材シリーズ「気がつきゃほら、ダンス」の中から、初歩的な段階の学習者のために開発した教材（課題）を使い、演示を模倣することから自分のイメージと動きを見つけて動く「表現」へ、その「表現」からテーマを決めて小作品を創りあげる「創作」へと誘うような活動の進め方を提案した。なお、『ダンス』に限らず、小学校第2学年から中学校第3学年までの児童・生徒を対象とした授業づくりは、ベテランの教員でも難しいことから、『ダンス』の指導経験が少ない担当教員が外部講師と協働することができるように、「んまつーポス」の1名（例えば、野邊）が「T2」となり、担当教員をアシストする形を提案した。

さらにWSは、「体験の深化、定着を図り、日常に戻していく段階」である「ふりかえり過程」が重要であることから、次の3つの提案を行った。一つ目は、各回の活動を切り取った写真²⁰⁾でデザインしたポスターを作成し、校内等に掲示するという提案である。また、それを、いわき市と兄弟都市の延岡市（宮崎県）の全小学校にも掲示し、宮崎を拠点に活動するアーティストと小白井小・中学校の子供たちとの交流を、小白井小・中学校の子供たちと延岡市の子供たちとの交流へと発展させる（ひろげる）という提案（2つ目）である。そして3つ目は、校長先生や教員も参加する、学校まるごとを舞台にしたコンテンポラリー・ダンスを創作・収録してビデオ作品を創り上演しようという、小中併設校ならではの提案である。

以上が本実践に対する、高橋（アドバイザー）の提案である。

6.2 おでかけアリオス「んまつーポス身体表現WS」の実践

本実践は、学習指導要領に示された小学校の低学年の『表現リズムあそび』と同高学年の『表現運動』、中学校の第1学年及び第2学年、同第3学年の『ダンス』のそれぞれのねらいと学習内容を踏まえ、「気がつきゃほら、ダンス」シリーズ（後述）から、中学3年生のモチベーションが高まり、かつ小学2年生が楽しめる8教材と、本実践のために、高橋と「んまつーポス」が共同で開発した、“実施校ならでは”の2教材を組み合わせ、5回の単元内容を構成した。なお、「気がつきゃほら、ダンス」シリーズは、高橋研究室が、「体育」の『ダンス』のために開発した教材群である。

おでかけアリオス「んまつーポス身体表現WS」

【実施期間及び回数】 2013年6月24日（月）～10月20日（日）の6回、

【実践校及び対象】 いわき市立小白井小学校・中学校

（小2：3名、小5：1名、小6：1名、中1：1名、中3：1名、男子4名・女子3名、合計7名）

【実施会場】 同小学校・中学校体育館及び教室、等
【担当教員】 T(1):橋本麻理江(小白井小学校教諭) ※T(2):野邊壮平(んまつーポス)
【外部講師】 豊福彬文(んまつーポス)、児玉孝文(同)
【単元構成】 導入(第1回)、展開(第2回～5回)、ふりかえり(第6回)
【活動内容】 「創作ダンス」
【アドバイザー】 高橋るみ子(宮崎大学教育文化学部准教授)
【実技補助】 川添圭路(NPO法人MCDC)、宮崎大学学生

6.3 延岡市立浦城小学校の「んまつーポスの未来ダンスWS」の実践

本実践と並行し、高橋の提案・指導の下、宮崎大学教育文化学部の4年生が実行委員会を結成し、「延岡市といわき市をつなぎ、ひろげるプロジェクト」(「平成25年度とっても元気!宮大チャレンジ・プログラム」採択事業)に取り組んだ。プログラムの目的は、両市の子どもの交流の促進を図ることである。活動の主な内容は、次の5つである。※ポスター、映像の作成は、NPO法人MCDCに依頼。

- ・本実践を紹介するポスターの作成及び配布。配布先は、いわき市の全小学校と、いわき市の兄弟都市である延岡市の全小学校
- ・「んまつーポスの未来ダンス in 浦城小学校」の実施(主催)。※延岡市立浦城小学校は全校児童8名の極小規模校である。
- ・浦城小学校の活動を紹介するポスターの作成及び配布。配布先は、両市の全小学校
- ・両実践の写真及びポスター展の開催
- ・小白井小・中学校のドキュメント・ムービーの作成及び上映

このチャレンジ・プログラムと関連させたNPO法人MCDCの事業として、近接の浦城中学校(同じく極小規模校)の生徒を対象にダンスWS(1回、2時間)を実施し、浦城小と連携を図った(小中連携)。本論では、浦城小及び浦城中の活動の詳細は省略する。

なお、実行委員の6名の学生が、本実践の第4回、第5回の活動に参加し、第6回に実施する「Skypeを利用した浦城小との交流」の予行練習を行った。Skypeを利用した遠隔地交流は、



ポスター1「導入」(第1回)



ポスター2「展開」(第2回)



ポスター3「展開」(第3回)



ポスター4「展開」(第4回)



ポスター5「展開」(第5回)



ポスター6「ふりかえり」(第6回)

「んまつーポス」の豊福と野邊が提案したものである。二人は、宮崎大学大学院教育学研究科に在籍中の院生であり、このチャレンジ・プログラムのオブザーバーを兼ねている。

7 おでかけアリオス「んまつーポス身体表現WS」の効果

7.1 担当者（本実践をコーディネートしたアリオス職員）の“ふりかえり”

二つの観点（音楽のプログラムとの比較、「珍しいキノコ舞踊団WS」との比較）を示し、本実践を観察参与して気づいたこと、あるいは本実践をコーディネートして分かったこと等を、担当者の矢吹（前出）がまとめた。次に示す（文言を一部差し替え・省略）

学校や教員にとって、音楽のプログラムはとてもイメージしやすく、そしてアリオスがこれまで実施してきた実績があることから、安心して受け入れている感じがする。本実践の場合は、小白井小・中学校の先生方も、はじめは不安そうに見えた。しかし、一緒にWSを行っていくなかで、あそこまで協力的に関わったことを考えると、先生方にとってもとても魅力的なプログラムなのだと思う。この小白井小・中学校の実践が、どこまでいわき市の学校・教員に浸透していけるかは未知数であるが、今後ダンスのプログラムを希望する学校が増えていくよう

に感じている。

音楽のアウトリーチの場合は、基本的に子どもたちは受け身の姿勢になりがちである。もちろん、音楽を聴くことが主目的なので当たり前ではあるが、おでかけアリオスでは、アーティストと子どもたちとの密なコミュニケーションを図るなかで、音楽を聴くだけでは得られないものを子どもたちに伝えるように考えてプログラムを構成している。ダンスWSでは、子どもたちが受け身ではなく考えや気持ちをそのまま表現にあらわすため、能動的にWSに関わることが出来るので、音楽に比べると子どもたちに及ぼす影響は大きいのではないかと。また、本実践は、記憶に残るものも多いように思う。子どもたちはきっとこの経験を忘れることはないと思う。

これまで、学校を対象にした音楽のプログラムは単発もの（年度内に1校につき1回）だけであった。同じアーティストが同じ学校・同じ子どもたちを対象に複数回を通してWSを行うということだけでも、単純にこれまでの手法とは異なり新しい試みであった。小白井小・中学校のプログラムは、1回だけのこれまでと比べ、アーティストと子どもたちとの関係が密になれる。継続的に実施するおでかけアリオスは、今後いろいろ展開することができるように感じている。心と身体が密になっているダンスWSは、子どもたちの内に秘めた才能や自己解放など、新しい自分に出会うきっかけになり得る。本実践は、他者と協力したり共有し合ったりしながら創り上げていくこの過程の中で信頼関係が築かれ、日常生活にも良き働きがもたらされるように感じた。回数を重ねるごとに身体表現の幅を広げ、最終的に作品にまとめ発表するプロセスをもつ本実践は、今後も続けていきたいプログラムである。

基本的に「珍しいキノコ舞踊団」も「んまつーポス」も、一アーティストとして、アリオスも専従スタッフも同じ接し方をしている。「んまつーポス」を教員だと考えて動いたことはない。実践校の先生方も同じだと思う。ただ、アーティストのバックに教育学を学んだ経験が有るということで、「んまつーポス」の子どもたちとの接し方や活動を分析する方法に、なるほどと納得することがあった。小白井の先生が口を出せないとか、任せきりになっているかどうかまではわからない。何をどのように展開していくのか、アリオスも「んまつーポス」に任せてしまっている部分もあるため、学校の先生がどうかというよりは、アリオスのスタンス次第ではないかと思う。もっと現場の先生の声をWSに反映したほうがよいのか、それとも「んまつーポス」に全てを任せられた方がよいのか、ケースバイケースではあるかと思うが、何を目標に、学校・んまつーポス・アリオスの三者が連携・協力してWSを実施するかにもよるのではないかと。ただし、いわき市の場合は、まだまだ身体表現をより効果的に実施できている学校は多くない。本実践を通じて、いわき市内の学校が身体表現への関心を高めていければと思う。

音楽のプログラムの実践校でも、学習発表会やクラブ活動でダンスの発表を行っているようである。内容はやはりEXILEやAKBが踊っているものをコピーして踊っていることが多いようだ。もちろんコピーすることでダンスの面白さが子供たちに伝わっているのであれば、あるいは身体表現による自己表現（の多様さ）に対する興味につながるならば良いのではないかとと思う。

WSが終わってしまった後、「んまつーポス」というアーティストがいないところで、学校や先生が子どもたちにどのように働きかけていくことができるのか、身体表現を学校教育の中でどのように展開させていくことができるのか、学校独自で続けていくことができるような仕組みを作っていけたらと考えている。

7.2 アリオス職員（担当者）への効果

矢吹氏の“ふりかえり”から、本実践のアリオス職員への効果について考察した。なお、本実践の子どもたちへの効果、学校・教員への効果、アーティストへの効果等については、改めて報告する。

- 1) 子どもたちへの影響が大きい、子供たちの記憶に残る、子供たちが新しい自分に出会うきっかけになる等、音楽のプログラムとの比較から、ダンス・プログラムの魅力について気づくことができた。→ 平成26年度も継続して「体育」に位置づけたダンス・プログラムを実施する（予定）ことになった。
- 2) 回数を重ねるごとに身体表現の幅が広がる、導入（オリエンテーション）からふりかえり（作品発表）までのプロセスがある等、単発のプログラムとの比較から、複数回のプログラムの進め方や、子供たちへの効果の大きさを理解・確認することができた。これは、単元のねらいが達成できるように各回のねらいを設定・実施する「単元学習」について、実践的に理解したということである。→ 他のジャンルについても複数回のプログラム（単元学習）の実施を検討していく。
- 3) 参与観察を通して自身の不安が消えたことから、ダンス・プログラムを希望する学校を増やすには、教員の不安を取り除けばよいこと、そのためには音楽のプログラムのようにイメージしやすくすればよいこと等に気づくことができた。またその不安が、自身の『ダンス』体験の少なさに困ることから、活動の実際をイメージできない教員を対象としたダンスWSの必要性に気づくことができた。→ 本実践の期間中に、当初の予定にはなかった教員を対象としたダンスWSを企画実施した。
- 4) 参与観察を通して、アーティストが学校教育に関する知識（例えば、子供の発達段階や、活動の位置づけ等）を持っていると、子供たちへの接し方やふりかえりの視点が違うことに気がつくことができた。
- 5) コーディネートの体験を通して、「体育」（教科）に位置づけたWS（「WS型の授業」）では担当教員とアーティストが協働すること、そのためには両者の協働の仕方をはっきりさせることが大事なこと等、「学級活動」や「文化的行事」と「WS型の授業」の違いが分かった。→ 「WS型の授業」をコーディネートする場合は、事前の打ち合わせ会議で、WSの目標を、学校・担当教員、アーティスト、そしてアリオス担当者が共通理解できるようにすることが大事であることに気がつくことができた。
- 6) コーディネートの体験を通して、「WS型の授業」では、もっと現場の先生の声をWSに反映したほうがよいのか、それともアーティストに全てを任せたほうがよいのかは、ケースバイケースであることが分かった。→ コーディネートをする担当者自身も、学校教育に関する知識が必要であることに気づくことができた。
- 7) 事前の打ち合わせやふりかえりを行う中で、「体育」で取り組まれている『ダンス』と社会文化のダンスとの距離や、『ダンス』の実態（“芸術経験としての問題”と“身体形式としての問題”の共存）が分かった。→ いわき市の『ダンス』の実態に関心を持つようになった。そして、いわき市の学校においても、新しい自分に出会うきっかけとなり得るダンス・プログラムが必要であることに気づくことができた。

以上、矢吹氏への効果から、公共文化施設と教員養成系学部との連携・協力が、ダンスのアウトリーチを行う職員に必要な実践力を高め、そうした職員の資質の向上が、公共文化施設と

「学校教育の連携」を促進させることが明らかとなった。

学校と芸術家をつなぐ総合的なアートマネジメント人材育成事業

大学を活用した組織図

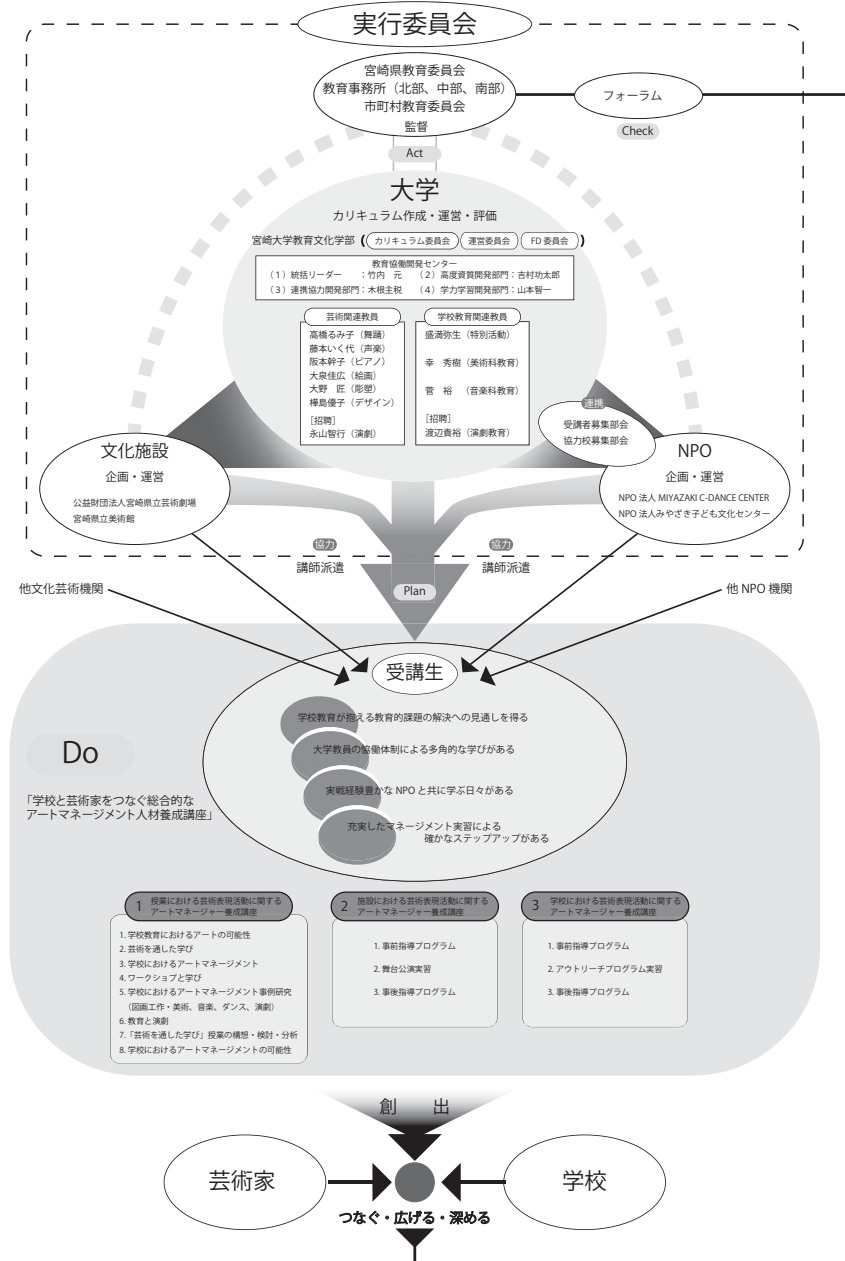


図5 学校と芸術家をつなぐ総合的なアートマネジメント人材育成事業組織図（作図：児玉）

8 おわりに

遠く宮崎大学教育学部（高橋研究室）に、アリオスの必要とする専門的な教育力があつたように、地方にも、公共文化施設の必要と合致する専門性や教育力を有する大学はある。けれども、『文化からの復興』（前掲書）が出版されていなければ、高橋らは、アリオスが何を必要としているかを知る術はなかった。同じく、高橋らが「んまつーポスのダンスWS」の可能性を打診しなければ、アリオスは、高橋研究室が「学校教育との連携」のために活用できる資源であることには気づかなかつた。中学校『ダンス』の必修化が走り出し、矢吹氏の「EXILEやAKBが踊っているものをコピーして踊っているようだ」と同じ授業風景は、全国の至るところで見ることができる。しかし、直に子供たちはコピーに飽きて、矢吹氏が期待しているように、新しい自分に出会うきっかけになり得る『ダンス』の魅力に気づくことになるであろう。その時のために、少しでも早く、教員養成系大学等の「知」を広く公開するためのネットワークの構築が急がれる。併せて、宮崎大学教育文化学部も、教員レベルの公共文化施設との連携・協力から、組織のもつ豊かな資源を活用した連携及び協力の可能性を探る時期である。

まとめに代えて。本研究が契機となり、宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センターは、振付家・ダンサー、NPO法人の代表・副代表、「平成25年度とっても元気！宮大チャレンジ・プログラム」のオブザーバー等、複数の役割を持って本実践に参加した「んまつーポス」を生かしたプロジェクトを立ち上げた（図5）。もし申請中の、平成26年度「大学を活用した文化芸術推進事業」が首尾よく採択となれば、学部の教員、地域の教育委員会、公共文化施設、アートNPO法人等を巻き込んだ、人材育成プロジェクトが発進することになるであろう。²¹⁾

9 注・引用文献

- 1) 文化庁「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律の施行について（通知）」を参照
- 2) 前出 1)
- 3) ニッセイ基礎研究所、いわき芸術文化交流館アリオス『文化からの復興 市民と震災といわきアリオス』水曜社、2012、254
- 4) 松本千代栄監修・編集『ダンスの教育学1 ダンス教育の原論』1992、64
- 5) 前出 4)、6
- 6) 前出 4)
- 7) 文化庁「平成25年度大学を活用した芸術文化推進事業採択一覧」http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/12daigaku/pdf/saitaku.pdf 2013年7月10日を参照
- 8) 前出 1)
- 9) 松本千代栄『こどもと教師とでひらく表現の世界』大修館書店、1985、書名
- 10) 前出 1)
- 11) 小学校学習指導要、第6章、特別活動、文部科学省、平成20年3月
- 12) 第65回舞踊学会大会「大会プログラム研究発表抄録集」2013、512
- 13) WS講師は「んまつーポス」。飛び出すこどもブンガクシリーズ#6「んまつーポス『いっすんぼうし』」とセットで実施した。2012
- 14) 前出 3)
- 15) 前出 3)、63

- 16) 珍しいキノコ舞踊団 <http://www.strangekinoko.com/> 2014年1月19日を参照
- 17) 前出 3)、234
- 18) 前出 3)、245
- 19) 高橋るみ子「ワークショップ型で輝くダンス授業」体育科教育、大修館書店 2014、40-43
- 20) 写真撮影・提供は、古田部暁欧、村井佳史、鈴木稜蔵、いわき市立小白井小・中学校教諭
- 21) 「平成26年度大学を活用した文化芸術推進事業」については不採択となりました。
(2014年1月30付、文化庁)